

石の宝殿周縁における林野火災跡地の緑地回復について

調査者 猪坂俊英・宮田和男・安田邦男・段林弘一・橋本光政
鬼丸貞英・藤原正彦 古池末之・藤原春善

1. はじめに

石の宝殿の北側から西側にかけての社寺林は、平成23年の失火によりほぼ半分の面積を焼失した。被災地はその後、地元のボランティアにより焼け残った樹木の伐採をした。その後、生き残ったウバメガシやアベマキ等の種子から苗木を育成し植栽を行っている。国の史跡に指定された事に伴い、今までのような作業は原則的に出来なくなった。高砂市教育委員会の要請で、兵庫県みどりのヘリテージマネージャー会による現地検討会が実施され、活発な意見交換が行われた。今後どのような活動が保存保護に必要なのかを検討し提言する。

2. 調査方法

- 1) 調査日：平成27年3月22日
- 2) 場 所：高砂市阿弥陀町生石
- 3) 方 法：関係者9名が教育委員会と現地の人の説明を受け、最後に兵庫県みどりのヘリテージマネージャー会参加者と意見交換し、史跡の保護と活用法について検討した。

3. 結 果

1) 被災地の概要

当地は代表的な瀬戸内沿岸部のせき悪荒廃地であり、母岩である流紋岩類が露出し土壌層は非常に薄く、有機質の絶対量が少ない事は容易に想像できる。かつてはアカマツが優占していたようだが、現在はウバメガシ、アラカシ、アベマキ、カナメモチ、ヤマザクラ、ネズミサシ、モチツツジ、コバノミツバツツジ、ヒサカキ等がみられる。平成27年現在、被災から4年が経過した。地表部はケネザサが数多く繁茂し、カナメモチ、アベマキの実生も確認できた。火事による裸地化が進んだことにより、ハギ類(多いのはマルバハギ)ツツジ類(モチツツジやコバノミツバツツジ等)が多数見受けられ、その花期には見事な景観を形成している事が想像できる。被災地の一部にはボランティアによる植栽が現在のところ活着しており、今後の生長に期待したい。ただし密植の感が強い。ボランティアの方々は非常に高い環境保全意識の持ち主であり、被災地で生き残った樹

木から採種し苗木を育成植栽している点は大いに評価すべきである。しかし、その植栽は森林化を急ぐのではなく、永続的な環境保全に結びつく保護策を考えるのが好ましい。

2) 被災地における検討

現在はウバメガシやアベマキが多くみられるが、今後は常緑高木の純林にならないよう心がけた植栽が好ましい。アベマキやマツ類の植栽は日差しが地面に到達しやすいので林床保護のためには、混植を推奨したい。我々が注目したのは、火災で地上部が焼失したものの萌芽したツツジ類とハギ類が多数みられた事である。これらの樹種は地しぼりの効果をもたらす大きな灌木要素であり、景観上も非常に有効な樹種として積極的に保護し、植栽する。他の導入樹種については多様性を考慮しながら出来る限り周辺に生育する樹木から採種、育成した苗を使って植栽する。周辺に見られるヤマザクラは景観的、生長面も非常に有効であり、ボランティアに携わる方々の景観保全意識の向上にも非常に有効である。

4. 今後の展望と提言

被災後地元住民による、よりはよい植生の回復を願う想いは大切であり、その想いに対しては十分に配慮し行政も保存保護活動に従事すべきである。以下に地元住民とともに行える保護活動について言及する。

1) 焼けて立ち枯れた木の伐採。

幹肌の焼けた木は腐りにくく、長期間にわたって山肌に立ったままであり景観上好ましいとは言えない。伐採し適当な長さに切った後、等高線の位置に沿って山肌に集積しておく。これは土壌の流亡を防ぐ意味もあり、長期的には土壌の蓄積を促し、より多くの樹木が繁茂する足掛かりにもなるものである。

2) 既存樹種の保護育成。

生き残ったアベマキやウバメガシ、ヤマザクラ等から採種し苗木を育成。実生1~2年をめどに植生の欠如したところを中心に植栽する。植栽間隔はおおむね2~5mとし、密植にならないように注意する。植え付けの際には不透水層が非常に浅い特有の土壌条件を考慮して、水抜きを設けた植え付けを心掛ける。焼け残りの樹木を生かし、可能な限り同じ種類の木が同じ場所に植えないように配慮する。これは今後、多様な樹種が階層構造を形成しやすいようにするための配慮である。ツツジ類は挿し木繁殖した苗木を育成し植栽する。現在定着しているツツジ類は日照不足にならないように配慮した管理を積極的に行う。

5. あとがき

近年、史跡等を中心にした森林を市民の保健・休養的、防災的役割を持った重要な近郊林として位置づけ、その整備が図られていて、当地区においても住民のボランティアにより山火事跡地の森林再生に多大な努力が払われている。一度荒廃化した森林の再生と整備には多大な費用と年月を要し、技術的にも複雑な内容を持っていることを痛感されていると思う。森林が置かれている条件によっては土壌が浸食され、溶脱され劣化の方向をたどることも自然でありその方向性を変えることはできないが、人の英知によってその速度を遅らせることは可能であり、少なくとも人為による荒廃化だけは避けるべきである。

限られた時間の中で十分な議論が尽くしたと言えないかもしれないが、長い目で見て、「文化を養う森林、森林を養う土壌」を念頭に、その土壌を考慮した環境の多様性を重視した成果が期待できる提言になれば幸いである。地域資源活用が叫ばれる昨今、地域住民の意識向上に繋がるまちづくりや地方創生事業として育つ事を願ってやまない。